

いつも心に川がある  
堀川まちづくりの会企画展

# 舟運・筏・川遊び 堀川のにぎわい

## 木材産業の発展と衰退 1

### 産業都市化を牽引した木材関連産業

名古屋は明治になり城下町から産業都市へと変身したが、明治時代の重要工産品をみると木材を使う産業がたくさんある。江戸時代から木曾材の集散地で、良質な木材を入手できるという長所を活かして発達したのである。上位10業種のうち、マッチ・履物・車輛・指物(家具、器具)・時計の5業種は木材を使う産業である。当時の鉄道車輛や人力車などは木の車体で、時計もケースは木製の柱時計であった。11位以下には、茶箱・桶・樽・櫃・仏壇産業があり、名古屋の主要産業は木が支えていた。木材の集散地から木材を利用した産業の町に名古屋は変わってきたのである。

江戸時代よりはるかに多くの木材需要があり、水主町から瓶屋橋にかけて製材・製函工場が密集して、川面には丸太が浮かぶ風景が生まれ、堀川は、まさに木材の川という状態になってきた。

『愛知県写真帖』(明治43年)に見る名古屋の産業



機械製材を行っている愛知挽木



名古屋漆器



マッチ工場



日本車輛製造

### 名古屋で誕生したベニヤ板

今では住宅や家具など、いたる所で使われているベニヤ板は、名古屋で誕生した。

ベニヤ板生みの親である浅野吉次郎は、安政6年(1859)に現在の西区那古野二丁目で桶や樽の製造をしている家に生まれた。

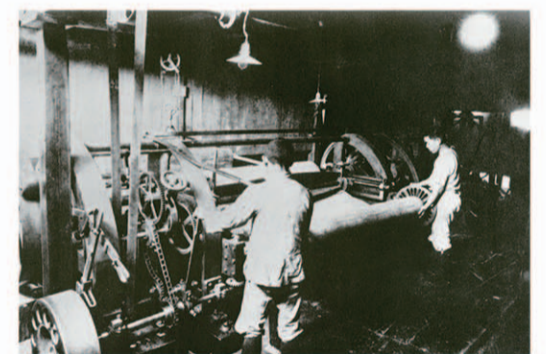
明治32~3年頃から三井物産の依頼で輸出用茶箱の製造を始め、38年頃には1か月10万セットもの生産になった。しかしイギリスからの安い製品が出回り始めて、それは合わせ板でできていた。さっそく木を薄く剥く機械の発明に取りかかった。この頃すでにマッチの軸木を造るため、大根のかつら剥きのように表面を剥いて薄い単板を作る機械があったが、遙かに広い幅で剥かなければならない。苦勞を重ね、明治40年に完成した。今のロータリーレースである。

次の課題は、単板の乾燥と接着だ。この善し悪しで合板の品質が決まる。蒸気と送風機で乾燥させる機械を開発し、米粉などから始めた接着剤も<sup>にかわ</sup>膠をホルマリンで処理するようになり品質が高まった。

明治41年に鶴舞公園で開かれた勸業博覧会には3尺×2間の板を出品するまでになり、板は「アサノ板」と呼ばれた。

合板の用途が拡大し、生産量も増えていく。大正15年には荒川源蔵が露橋(現:中川区露橋)の工場でラワン合板の量産を始め、品質の向上と価格低下により生産が増え、東南アジアやアメリカ・ヨーロッパまで輸出されるようになっていった。しかし、良いことばかりではない。昭和初期は恐慌の時代であった。この嵐のなか、浅野木工所は6年に廃業のやむなきに至った。

昭和8年には全国ベニヤ板業者連合会が結成され、加入者は昭和9年時点で全国123業者、そのうち名古屋支部には全国の18%にあたる22業者が加入していた。名古屋は、合板生産のメッカになっていたのである。



木を剥くロータリーレース



のり付け作業 (上下とも『合板七十五年史』)